

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
2012 年度 JASSO ショートビジット派遣報告書

報告者氏名 長岡 慶

2010 年度(入学・編入)

1. 研究課題:

現代ヒマラヤ地域における社会変容とチベット医学

2. 渡航先:

現地滞在期間: 平成 25 年 1 月 3 日 ~ 25 年 3 月 16 日 (73 日間)

3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

本研究の目的は、日常生活の視点から現代ヒマラヤ社会における社会変容とチベット医学との関わりを明らかにすることであり、ネパール(カトマンズ)にて調査をおこなった。1970年代からチベット系社会に変化が始まり、それとともないチベット医学をめぐる状況も変わってきていることがわかった。例えば、シェルパと呼ばれる人々はもともとネパール東部のソル・クンプ地方一帯(エベレスト周辺)に居住し農業や牧畜を営んでいたが、1970年代以降首都のカトマンズに移住する人が増えた。ネパールは1990年に民主化され翌年に経済自由化が開始されたが、シェルパ社会における変化の傾向はそれより以前の、チベットとのトランスヒマラヤ交易の終焉(1960年代初頭)の頃からすでに始まっており職種や食生活が多様化している。チベット医学の状況においても同様に、1970年代後半頃から診療所による治療が行われるようになった(以前は村の僧院やチベット医の家)。チベット亡命政府(拠点はインド)の診療所が最初にカトマンズに設置され、チベット本土(中国領)からも文化大革命から政策が転換した1980年代以降診療所が設置され始めた。ブータン、モンゴル、中国と異なり国家的な保護政策は行われていないものの、現在カトマンズにはインド・中国から来たチベット医の運営する診療所が多く並立し、それぞれ独自に展開していることがわかった。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や長期的な展望について述べてください

今後は、より長期間の渡航または留学を行い現地調査に基づく知見を深めたい。とくに、今回の調査で関わることの多かったシェルパの人々について、ソル・クンプ地方に赴いて調査できればもっと日常生活や病い、移住による変容、医療をめぐる状況を知ることができたが、今回の短期調査では時間がなくて行くことができなかった。今後の課題としたい。長期的な展望として今回の研究テーマについて、インドやネパールで継続的に調査をすすめ博士論文としてまとめたいと考えている。これまではチベット語を主に学習し、チベット語を使った調査を進めてきたが、北インドやネパールなどのヒマラヤ社会を研究対象として論じていくうえでは、チベット語よりも国の公用語であるヒンディー語やネパール語のほうが通じるチベット系社会が多くあるのでそれらの言語についても学習し調査するために十分な語学力をつける必要がある。

5. 本プログラムに参加した感想や、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいか、希望をお聞かせください

このプログラムを通じて、現地調査や海外文献の収集のほか、普段関わることのないトリブバン大学の研究者と議論することができ、自分の研究に関して多くの重要な知見や示唆を得た。研究者との学術交流は自分の研究を改めてとらえなおすいい機会となるので、これからも積極的におこなっていききたい。今後、半年から1年の長期渡航プログラムや、語学学習プログラム、国際学会の参加支援のプログラムなどがあればぜひ参加したい。

署名